

幼児発達学専攻における教育実習の現状と課題

－ 3年間にわたる実習園からの評価分析を通して－

Current status and issues in practice teaching by students majoring in child development :

Analysis of the evaluations given by host kindergartens
over a three-year period

天野 珠 路¹⁾ 桐 川 敦 子²⁾

Tamaji AMANO and Atsuko KIRIKAWA

Abstract

In connection with the kindergarten teacher training course at our college, we analyzed the current status and issues in practice teaching in kindergartens, mainly on the basis of evaluations given by the host kindergartens. Evaluation feedback was given by a total of 95 host kindergartens for 100 student trainees over a three-year period from 2012 to 2014.

We added up the evaluation points, which were assigned on a 5-point scale, for 12 items of the Practice Teaching Evaluation Table sent from each kindergarten and performed an itemized analysis. The results showed that the student trainees, regardless of their year of study, were assessed low in “proactiveness” within the category of teaching attitude and in “planning” within the category of teaching procedure. A number of problems were also found with regard to “recording method” in the category of teaching procedure. Meanwhile, high scores were given to “appropriate dress” and “cooperativeness” in the category of teaching attitude. Among the items of teaching procedure, the highest score was given to “relationship with children.”

The evaluations by the host kindergartens revealed the characteristics and issues of the students majoring in child development at our college. The evaluation feedback also served as a tool for understanding what types of student trainees kindergartens need and which personal characteristics are desired for kindergarten staff. The analysis suggested that further study will be necessary to elucidate the relationships between practice teaching and the content/method of classroom lessons.

Keywords : *practice teaching in kindergarten, evaluation of practice teaching, kindergarten teacher training course*

I. はじめに

保育士及び幼稚園教諭（以下、「保育者」という）の養成において、保育現場における実習が重要であることはいままでのない。実際、養成課程のなかで、実習までに習得した理論的学習、技術的学習を土台に直接、保育現場から学ぶ実習は制度的に規定されている。すなわち、保育士の養成に関しては児童福祉法及び児童福祉法施行規則に、幼稚園教諭の養成に関しては教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則に、実習にかかる規定があり、保育実習及び教育実習は保育者養成

において不可欠なものとなっている。

しかし、授業で学んだ保育に関する知識や技術と実習を通しての学びが有機的に結び付くためには多くの課題があり、保育者養成に携わる複数の教員がそのことに言及している¹⁾。また、保育現場での子どもや保護者の実態を踏まえた教授内容や教授方法の必要性、保育現場と養成現場との連携・協働の重要性について指摘するものも多い²⁾。

こうしたこと背景として、近年、子育て環境の変化に伴う保育ニーズの多様化や子どもの育ちの課題が指摘されるなか、保育所や幼稚園に求められることが増大しているという実態がある。さらに、保育者が果たす役割や専門性が重要なものとなっている。一方、

1) 日本女子体育大学（准教授）

2) 日本女子体育大学（講師）

IT等の普及によりネット社会といわれる現在、学生のなかには生活経験や直接体験が乏しい者もあり、生身の子どもとの関わりや保育現場の保育者とのやりとりに不安を抱くケースもある。このような中で、保育者の養成を担う大学等において、一人ひとりの学生の資質や能力を踏まえた実習指導や子どもの実態に即した実践力、応用力のある人材を育成するための実習が強く求められている。

本学においても、実習に関わる現状と課題を踏まえ、より質の高い保育者養成を検討、模索していくことは重要な意味を持つと考えられる。特に、本学の特性や教育環境を生かして実践力、応用力のある保育者を保育現場に輩出していくことは社会的使命であり、責任である。本稿は、そのための一助として、保育者養成にかかる近年の実習を振り返り、今後の教育や学生指導に活かしていきたいと願うものである。

II. 本学における幼稚園教育実習の概要

本稿で取り上げる幼稚園教育実習について、まず、その概要を説明した上で論をすすめていきたい。また、保育者養成に係る実習全体についても最小限、触れて本論へつなげることにする。

1. 保育者養成に係る実習について

幼稚園教諭免許と保育士資格の両免を取得するためには、図1にあるように合計4回の実習が必要となる。また、それぞれの実習の前後に「実習指導」の授業が設けられている。

教育職員免許法で規定されている幼稚園教諭1種免

許取得のための最低取得単位数は59単位である（2種免許は39単位）。このうち、実習に係る科目は、幼稚園での4週間にわたる実習4単位と実習指導1単位の計5単位となっている。また、児童福祉法施行規則で規定されている保育士資格取得のための最低取得単位数は68単位であり、実習に係る科目は保育実習Ⅰ、Ⅱ合わせて3回の実習で6単位、それぞれの実習に「実習指導」の授業が1単位ずつ計3単位あり、合わせて9単位となっている。

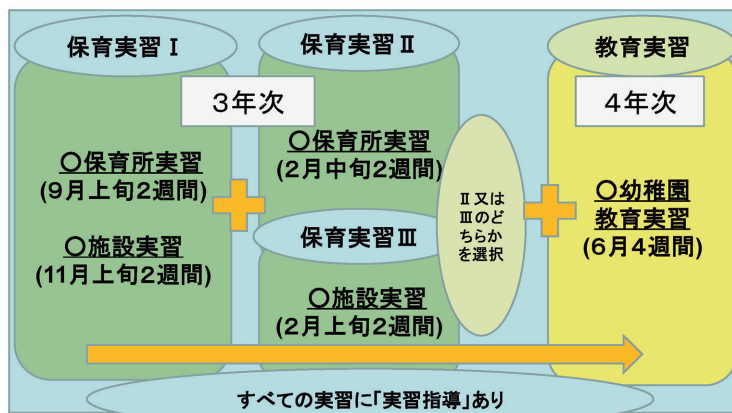
2. 本学における実習の時期

幼稚園教育実習は連続する4週間でなく期間を分けて実施してもよいことになっているが、本学においては4週連続して4年次の6月に実施している。なお、保育実習Ⅰは、保育所実習が3年次の9月上旬、施設実習は3年次の11月上旬にそれぞれ2週間ずつ行われ、保育実習Ⅱとして2回目の保育所実習が3年次の2月に行われている。2回目の実習Ⅱで施設実習を選択することも可能であるが、本学においては、原則として保育実習Ⅰの実習先と同じ保育所で行う。よって、幼稚園での教育実習は3年次に保育所実習と施設実習を終えた後、最後の実習として4年次に行われ、学びの集大成ともいえる重要なものとなっている。

3. 実習園の選択

実習先の幼稚園は、学生本人が自分で選ぶことになっているが、このことは、実習先を調べ、選択する力や現場と交渉する力を養うという意図がある。学生は、自分が卒園した園や自宅近くの園を選ぶ傾向にあり、地方から出てきている学生のほとんどは、地元

図1 保育者養成に係る保育実習の仕組み



戻り実家近くの園で実習している。このため、実習巡回訪問指導において、担当教員が遠方まで出かけている。なお、実習先の幼稚園の選択に関して担当教員が相談に応じたり、適宜、助言指導を行い、学生の実習をサポートしている。

4. 実習の目的と実習指導

本学における幼稚園教育実習の目的は、シラバスに明記しているように「幼稚園における実際の保育にかかわり、幼稚園教育（教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責任等）の理解を深め、保育者としての資質を高めること」である。実習における保育や子ども理解を助け、有意義な実習となるよう「実習指導(教育実践研究を含む)」の授業が実習前に10回、実習後に5回、計15回行われる。この中で、事前指導の一環として、本学附属のみどり幼稚園において参加実習を行い、子ども理解を深めるとともに記録の取り方等について学べるようにしている。また、保育教材を作成したり、教材研究や遊びの研究にも取り組み、実践力の涵養に努めている。保育指導案の作成に関する指導は複数回にわたり行い、個人指導にも時間をかけている。

さらに、実習後には実習の自己評価及び報告会を行い、実習で得たものを皆で共有したり、今後に生かすことができるよう働きかけている。

5. 実習の実際

現在、本学における幼稚園教育実習は、「幼稚園実習要項」に基づき実施されている。この要項は毎年、実習前に評価表などとともに実習先の園に送付している。実習内容として第1週目から2週目にかけて見学・観察実習を行い、第3週目から4週目にかけて部分実習と責任実習を行うが、実際には園の実状により臨機応変に対応している。しかし、おおよその園では、本学の実習要項を尊重して4週間にわたる実習を計画し、段階を経て学生の学びが深まるよう配慮していたている。

6. 実習評価表

本学では教育実習評価表(表1)を作成し、実習終了後に学生の実習評価として幼稚園から大学に送付される。評価表は、実習態度、実習内容、実習記録の3つの視点で分けられ、それぞれに具体的な評価項目が合わせて12ある。この12項目及び総合評価は「とても

よい」から「劣る」まで5段階評価となっている。また、園側からの所見欄を設けている。

評価項目の内容は、幼稚園教育要領における保育の基本やシラバスにある実習目標等を踏まえ、実習生として求められることを示しているが、学生たちにとっては実習前にこの評価表を手にするすることで、自分たちがなすべき行いや実習内容を理解する助けとなっている。

III. 方 法

保育者養成にかかる実習のうち、本稿においては、幼稚園における教育実習を取り上げる(今後、順を追って保育所実習、施設実習についても同様に取り上げていく)。

まず、平成24年度から平成26年度までの3年間にわ

表 1

評 価 表

日本女子体育大学 幼児発達学専攻
実習生氏名 _____
学籍番号 _____

1. 出席状況

実習期間 自 平成 年 月 日 至 平成 年 月 日

出席すべき日数	日	欠席	回
出席した日数	日	遅刻	回
		早退	回

2. 評価

評価の項目	評価の観点	と					
		とてもよい	よい	普通	やや劣る	劣る	
実習態度	1. 服装	清潔で快く整っていて、実習に適していたか。					
	2. 明朗さ	明るくてハキハキしていて、好感を与えたか。					
	3. 積極性	質問等をよくし、積極的に実習したか。					
	4. 協調性	職員や他の実習生と協力的であったか。					
	5. ことば	職員や子どもに対する話し方が適切であったか。					
実習内容	6. 子どものかかわり	子どもとすんでかかわり、遊びや活動にだけこんでいたか。					
	7. 発達の理解	子どもの発達をよく理解し、適切に対応したか。					
	8. 実習の目的	毎日の実習の目的および内容が達成されていたか。					
実習記録	9. 記録の提出	提出期限をよく守ったか。					
	10. 記録の仕方	要点をつかんで正確に記録したか。					
	11. 反省・評価	自分の実習を反省・評価し、次の保育に生かしたか。					
総合評価	実習態度・内容・記録をもとに総合的に評価してください。						
所見欄	(簡単に記入していただけたら幸いです。)						

平成 年 月 日

園(所)名
園(所)長

公印

たる実習の評価（実習園から送られてきた評価表）の結果を集計し、評価項目ごとにグラフ化する。さらに実習園で記入する「所見」内容を踏まえ、学生の実習態度や実習内容について、分析・考察し、幼稚園実習の現状を明らかにする。

なお、評価表は、平成24年度29名分、平成25年度41名分、平成26年度30名分の計100名分の100枚であり、実習先の幼稚園は計95箇所である。平成26年度については、9月1日現在、実習園から評価表が返送されてきたものに限るが、後日、最終的な集計を行うこととする。

また、学生の実習評価を数値化し集計するにあたり、5段階評価の「とてもよい」を5点、「よい」を4点、「普通」を3点、「やや劣る」を2点、「劣る」を1点とし、それぞれの項目の評価を単純計算して平均を出し、各年度の実習評価をグラフ化するとともに、3年分の各項目及び総合評価の平均値を示すこととした。

評価表の結果を分析、考察することにより、本校における幼児発達学専攻学生の特徴や課題を明らかにするとともに、保育現場で求められている保育者像などについて考察する。さらに、こうした結果を踏まえ、今後の実習の在り方や学内における授業内容や指導法などについて考察を重ねる。

IV. 結 果

1. 平成24年度の評価とその特徴

平成24年度の実習生29名のうち、総合評価では「5」が8名、「4」が13名、「3」が8名であり、平均では4.0となっている。また、実習態度に関わる5つの項目の平均は4.0、実習内容に関わる5つの項目の平均は3.7、実習記録に関わる2項目の平均は3.6となっている。（図2-①）

実習態度に関わる各項目の平均は「服装」、「明朗さ」、「協調性」、「ことば」が4.0以上だが、「積極性」は3.8となっている。中には、他の複数の項目で「5」と評価されているのに、「積極性」だけが低い学生がいる。この学生を含め、実習態度に係る5項目のうち2以下の評価があった者は3名、多くの学生は「4」または「5」の評価となっている。

実習内容に関わる各項目の平均は、「子どもとのかかわり」が4.2と最も高く、他の4項目については3.4～3.8となっている。特に、「計画の作成」は3.4であり、「2」と評価された者が5名いる。「計画の作成」、

平成24年度
実習態度平均,実習内容平均,
実習記録平均,総合評価平均

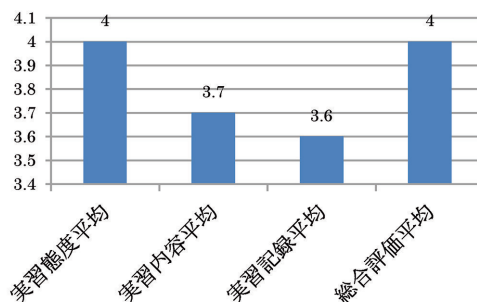


図2-①

平成24年度 各項目平均

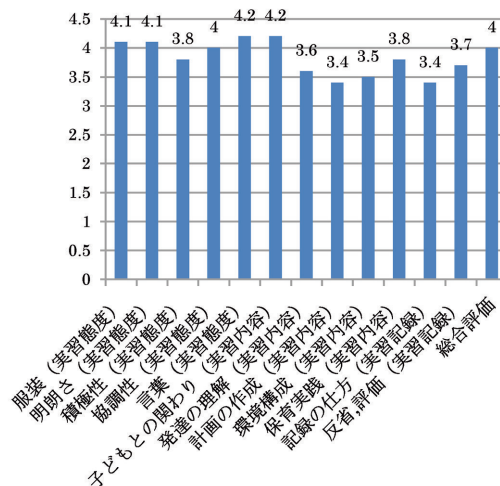


図2-②

「発達の理解」、「環境構成」、「保育実践」の項目は「3」または「4」の評価が多く、「子どもとのかかわり」では、「4」または「5」の評価が多くなっている。

実習記録に関わる各項目の平均は、「記録の仕方」が3.4、記録の「反省・評価」が3.7となっている。両項目とも「2」と評価された学生が3名いる一方、両項目とも「5」の学生が4名いる。多くの学生の評価は「3」または「4」であり、すべての項目で「3」の評価が最も多かったのは「記録の仕方」（14名）である。（図2-②）

2. 平成25年度の評価とその特徴

平成25年度の実習生41名のうち、総合評価では「5」

が6名、「4」が24名、「3」が11名であり、平均では3.9となっている。また、実習態度に関わる5つの項目の平均は4.1、実習内容に関わる5つの項目の平均は3.6、実習記録に関わる2項目の平均は3.8となっている。(図3-①)

実習態度に関わる各項目の平均は「服装」、「明朗さ」、「協調性」が4.1以上だが、「ことば」と「積極性」は3.8である。実習態度に係る5項目のうち2以下の評価があった者は6名、多くの学生は「4」または「5」の評価となっている。

実習内容に関わる各項目の平均は「子どもとのかかわり」が4.0と最も高く、他の4項目については3.3~3.6となっている。特に、「発達の理解」は3.3で

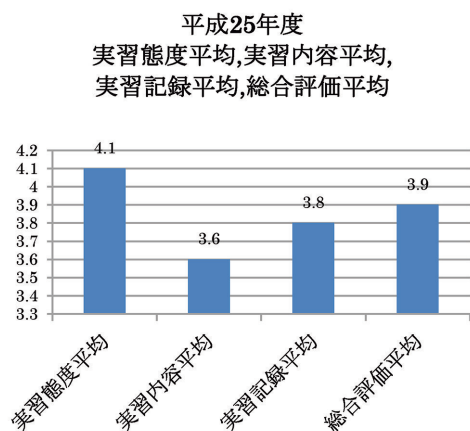


図3-①

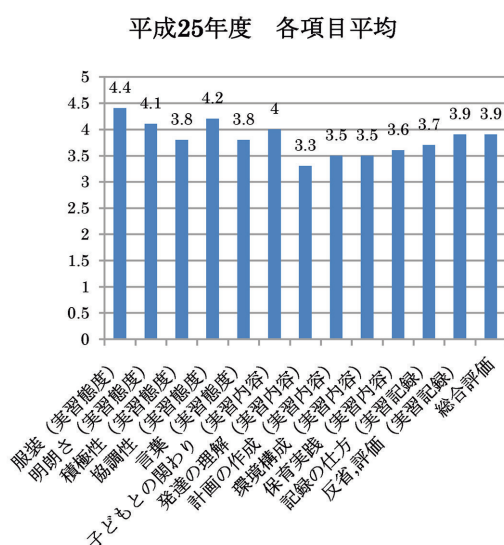


図3-②

あり、「2」と評価された者が3名いる。「発達の理解」、「計画の作成」、「環境構成」、「保育実践」の項目は「3」または「4」の評価が多く、「子どもとのかかわり」は「4」または「5」の評価が高くなっている。

実習記録に関わる各項目の平均は「記録の仕方」が3.7、記録の「反省・評価」が3.9となっている。「記録の仕方」で「2」と評価された学生が2名、「5」と評価された学生が8名、「反省・評価」では「2」と評価された学生が2名、「5」と評価された学生が10名である。他の学生の評価は3または4であり、すべての項目で「3」の評価が最も多かったのは「記録の仕方」(16名)である。(図3-②)

3. 平成26年度の評価とその特徴

平成26年度の実習生のうち、8月30日現在、実習先から返送された評価表30名分を集計した。このうち、総合評価では「5」が7名、「4」が15名、「3.5」が1名、「3」が6名、「2」が1名であり、平均では4.0となっている。また、実習態度に関わる5つの項目の平均は4.0、実習内容に関わる5つの項目の平均は3.6、実習記録に関わる2項目の平均は3.7となっている。(図4-①)

実習態度に関わる各項目の平均は「服装」、「明朗さ」、「協調性」、「ことば」が4.0以上だが、「積極性」は3.6であり「2」と評価された者が4名いる。全体としては3~5の評価となっている。

実習内容に関わる各項目の平均は「子どもとのかかわり」が4.0と最も高く、他の4項目については3.4~3.6となっている。特に、「計画の作成」と「環境構成」は3.4であり、「計画の作成」では2以下の者が3名い

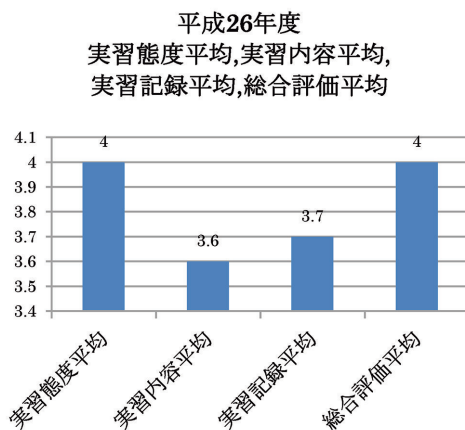


図4-①

平成26年度 各項目平均

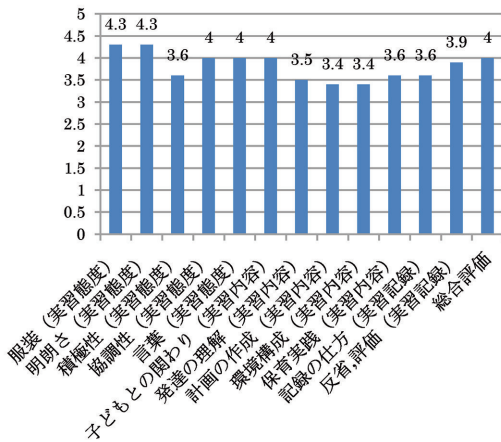


図4-②

るが、この3人は「服装」,「明朗さ」,「子どもとのかかわり」の項目では「5」と評価されているものもある。「発達の理解」,「計画の作成」,「環境構成」,「保育実践」の項目は「3」または「4」の評価が多くなっている。

実習記録に関わる各項目の平均は「記録の仕方」が3.6, 記録の「反省・評価」が3.9となっている。2以下と評価された学生が、「記録の仕方」で3名,「反省・評価」で4名いる一方,「5」の評価を受けた学生が「記録の仕方」で5名,「反省・評価」で10名いる。2～5と評価が分散している傾向にある。(図4-②)

4. 3年分の評価とその特徴

これまで見てきたとおり, 実習評価は年度によって大きな違いはなく, 3年分の評価の平均と各年度の平均もほぼ重なる。すなわち, 平成24年度から26年度に幼稚園教育実習をおこなった学生100名の実習評価の平均は, 総合評価3.97, 実習態度4.03, 実習内容3.63, 実習記録3.70である。(図5)

実習態度に関わる項目では,「積極性」が3.7,「ことば」が3.9であるが,「服装」,「明朗さ」,「協調性」は4.1~4.3と高くなっている。また, 実習内容に関わる5つの項目のうち,「子どもとのかかわり」(4.1)以外は, 3.4~3.7とやや低くなっている。特に,「計画の作成」は12項目すべてのうちで最も低くなっている。実習記録に関わる項目では「記録の仕方」が3.6,「反省・評価」が3.8であり, 学生により評価のばらつきがみられた。

3年間 実習態度平均,実習内容平均, 実習記録平均,総合評価平均 (24年度...赤,25年度...緑,26年度...青)

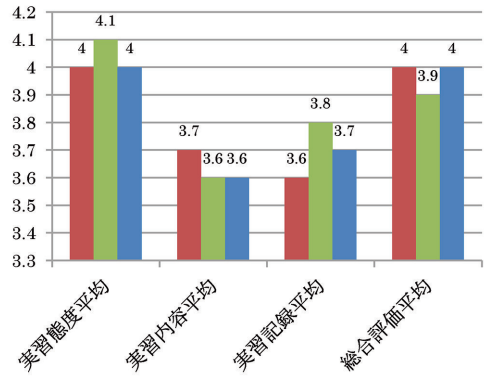


図5

V. 考 察

1. 実習評価にみる本学の学生の特徴と課題

1) 「実習態度」に関する評価とその課題

3年間にわたる学生の実習評価を見ると,「実習態度」に関しては, 総じて評価が高く, 実習に臨むための基本的事項はおさえられていると考えられる。中でも「服装」や「明朗さ」「協調性」が高いことは, 学生がこれまでの経験や実習の事前指導, みどり幼稚園での学習などを通して体得してきた素養であると思われる。

しかし, 一部の学生ではあるが「ことば」の評価が低く, 子どもの前に立つ者として言葉遣いや言語力に課題があり, 個別指導の必要性があるだろう。また, 実習態度に係る項目の中で「積極性」が最も低い値であり, 学生自ら子どもや職員と関わり積極的に学ぶ必要性が示唆された。この項目の評価の視点は「質問等をよくし積極的に実習したか」であり, 学生の中には質問したりすることなく, 全体に受け身の实習であったことが, 実習園の所見からもうかがえる。

実習生の積極性が欠けることについては, 他大学の教員からも報告されており, たとえば, 開は実習園からの意見として「おとなしいと感じることが年々増えている。もう少し前向きな積極性がほしい」, 「こちらから促したことはしてくれた。次回からはもっと積極的に」といった声を紹介している。本校における教育実習においても, たとえば「もっと積極的に子どもと関わったり先生方に質問してもよかったですね」(平成

24年度)、「子どもとのかかわりをもう少し積極的に行えるとよいでしょう」(平成25年度)といった所見が評価表に記されている。

全体としては、評価が高い実習態度であるが、今後、さらに主体的に学んだり、自分で課題を見出し、疑問を投げかけたり探求したりする力を育むことが求められるだろう。

2)「実習内容」に関する評価とその課題

実習評価を通して、学生の「子どもとのかかわり」は全体的に評価が高く、これは、保育実習やみどり幼稚園での経験を通し、子どもと関わる経験を既に持っていたことによるものと考えられる。それに加えて、元来「子ども好き」である学生がすすんで園児と関わり、共に遊んだり活動したりすることで子ども理解を深めていったと思われる。しかし、他の項目では、全般に3または4の評価が多く、特に「計画の作成」と「発達の理解」に課題があることが明らかになった。

計画(指導案など)の作成については、授業の中でも取り上げて実際に作成してみる等して取り組んでいるが、実際には学生の理解力、文章力などに差があり、個別指導が必要となっている。また、園の方針や保育の特色、子ども観、保育観などを踏まえて現場で必要とされる指導案を作成するための手立てを事前に学ぶことの必要性もあるだろう。計画と連動する「発達の理解」についても、幼児の発達特性や年齢に応じた対応を具体的に学ぶ必要が示唆され、理論と実践の往還がさらに求められる。このことは「環境構成」についての課題ともつながり、子どもの発達を丁寧に読み取りその理解を深めることが保育の環境構成力に結びつくと考えられる。複数の教科目の中での系統的な学びが必要であり、教員間で保育の専門性に関して相互理解を図りながら育成すべき保育者像を明確にしていくことが求められる。

3)「実習記録」に関する評価とその課題

「実習記録」では、特に「記録の仕方」に課題があることが明らかになった。この項目の評価の視点は「要点をつかんで正確に記録したか」であり、要点をつかむためには目の前の子どもの実態や、実際に展開されている遊びや活動の全体像を把握し、何が重要であるかを読みとる力が求められる。こうしたことに関して、学内では「子ども観察演習」や「実習指導」等の授業で取り組んでいるが、現場では子どもの遊びや活動が多様に繰り広げられ、予想外の展開になることも多い。このため、保育のポイントや保育者の援助についての

確に記録するために、現場の保育者とのやりとりや保育者からの学びが必要と考えられ、より積極的に保育者に質問したり、疑問点を投げかけたりすることが必要だろう。

また、学内の授業等においても、学生が自ら課題を見つけ、そのことを提示したり、他の学生と協議したりしながら課題解決のための要点を探っていく取組を取り入れることが有効と考えられる。「問い」そのものを考え、解決に向けて総合的に判断し、そのプロセスを表現していく力が記録の要点を明確に記すことにつながると思われ、こうした授業内容や方法を構築していくことが必要である。

一方、学生の文章力や国語力に関しては、他の教科目においても課題であり、教員全体で認識を共有しながら、見通しを持って対処していかなければならない。特に、関連する教科目を担当する教員が、協働して具体的方策を考え、学生の文章力や記録する力を高めていくことが肝要である。

2. 本学における幼稚園教育実習の特色と課題

本学においては、幼稚園教育実習の実施時期を4年次の6月に設け、それまでの理論的学習や保育所実習、施設実習などでの学びを踏まえ、学生が主体的に幼稚園教育実習に取り組めるよう指導してきた。具体的には、連続する4週間の実習を元気に欠席することなく終えるための健康管理や生活面での指導、これまで学んだ保育や幼稚園に関する知識を応用し、実際に子どもと向き合い保育していくための技術、子どもの発達や特性を踏まえ、保育を計画したり指導案を立てる方法、実践を豊かに展開していくための教材研究や遊びの展開法など、主に実習の事前指導において個別指導を含め、取り組んできたが、1学年40人という規模であったことも丁寧な指導につながったと考えられる。

また、本校は附属幼稚園をもち、2年次、3年次の授業で附属のみどり幼稚園の協力を得て園児と学生が関わりながら実践を通して学ぶ体制をとっている。具体的には、「運動遊び」、「音楽表現Ⅰ」、「子ども観察演習」、「保育指導法演習」の授業を幼稚園で行い、実習前から実際に子どもと関わり、事前学習を積んでいる。このことが、教育実習において有効であることはこれまでの報告からも明らかであり、桐川は本校幼児発達学専攻4年次学生への調査で「『積極的実習態度』についての自己効力感は、実習前から高い」⁹⁾としている。

保育者養成における実習とは「理論と実践を結びつ

け、学生の中に保育者・教育者として生きていく力を培っていくもの」⁶⁾であり、本校においても幼児発達学専攻教員を中心に各教員が授業や学生指導を通して保育実践力の育成に努め、その成果が実習評価の中にも表れていると考えられる。

一方、実習園の選択に関して、鈴木は「〇保育・教育の方針及び実践が望ましく、研究的な態度で取り組んでいる。〇施設整備・人員配置等、運営面で法的に適な条件が整っている。〇実習方針等を正しく理解し、学生の受け入れに積極的である。〇実習の指導体制が確立している。〇学生が通勤する上で、無理のない地域にある」ことを実習先として相応しい園の条件として提示している⁷⁾。本校においても、こうしたことを踏まえ、実習園の選択に関して指導しているが、実際には学生の選択に任せることも多く、出身園(母園)であること、自宅から近いことが優先順位として高い傾向がある。このことについては、今後検討していく必要があるかもしれない。

VI. 結 論

1. 実習評価を踏まえた今後の課題

実習園からの評価を通し、「明快快活に子どもと関わり意欲的に学ぶ学生」の姿が浮かび上がるとともに、「計画の作成・記録の仕方に課題がある」ことが明らかになった。また、保育実習や附属幼稚園での学びが生かされている一方、自ら質問したりするなどの積極性がやや欠ける点も明らかになった。学生の性格や基礎学力などに個人差はあるが、実習評価を踏まえ、今後、学内での実習指導や学生指導の中で改善していく余地があるものと考えられる。

また、計画の作成や記録に関しては、多くの保育者養成校において課題とされており、たとえば、開は大学と実習園との実習懇談会で出された実習園からの要望の第一が「文章力」であることを明らかにしている²⁾。また、國光は、実習前から「生の幼児の生活そのものに触れ、記録しておく習慣づけ」の重要性について言及している⁴⁾。文章力や記録については課題が大きいが、教員全体で計画的かつ実践的に取り組んでいきたいと考える。さらに、田甫が指摘するように、実習園の「指導教諭の助言が学生の記述の深まりに影響を与える」⁸⁾ことを踏まえ、幼稚園教諭とともに保育の記録について考えていくことも必要ではないだろうか。

教育実習における園からの評価は全体的に高い傾向があり、ほとんどの学生は意欲的に実習に取り組み、成果を得ている。しかし、さらなる実践力の育成のために、保育者養成にかかる課題を明らかにしながら、4年間の養成期間を見通し、保育者としての専門的素養が身につくよう創意工夫を重ねていくことが必要であろう。具体的には実習に関するワークブックを作成したり、4年間の学びを学生自ら概観できるようなシートを作成する等、学生の主体性や課題意識を促していくための手立てを考えていきたい。

2. 実習園との連携に関する課題

現在、保育現場は子育て家庭や保護者への支援を強く求められ、制度改革の波が押し寄せる中、刻一刻と変化している。保育者養成の場においても保育現場が直面している問題や課題について情報を共有したり、現場が求める実践力や保育者像などを把握したり、現在の子育て家庭や保護者の意識等も視野に入れるなど、現場の状況を踏まえた養成や実習指導が求められる。これに関連して塚田は「保育者養成校においても、時代のニーズに沿った多様な保育サービスに対応することができる質の高い保育者の養成が求められている」⁹⁾とし、実習先との連携について言及している。

当然のことながら、附属のみどり幼稚園との連携・協力体制をさらに強めていくことは重要である。2年次、3年次の学生が授業の中で園児と直接かかわり、子ども理解を深めていくためにも幼稚園教諭との連携は欠かせない。それに加え、近隣の幼稚園との連携も模索したいものである。

保育者養成にかかわる多くの教員が指摘するように「大学での学びと実習での学びの融合」¹⁰⁾が重要であり、そのためにも実習園と大学、現場の職員と大学教員との学び合いや連携体制が重要であり、実践力のある保育者の育成は社会からも求められている。今後、学内で十分に協議し、実習及び保育者養成の充実を図っていきたい。

注釈

- (1) たとえば、日本保育学会における研究発表では実習に関する課題等を論じたものが平成25年度は約30件あり、その多くが学内での学習と実習を通しての学びとの連動について論じている。
- (2) 同様に、日本保育学会における研究発表において、保育現場と養成現場との連携、協働の重要性について論じたものが平成25年度は約25件あり、保育現場と養成校が協

議する場や共同研究の重要性などについて指摘している。

引用文献

- 1) 開仁志 (2011) 富山県における実習現場から保育者養成校へ求めるもの, 富山国際大学子ども育成学部紀要第2巻: 102
- 2) 開仁志 (2011) 富山県における実習現場から保育者養成校へ求めるもの, 富山国際大学子ども育成学部紀要第2巻: 101
- 3) 桐川敦子 (2014) 幼児発達学専攻の学生における実習前後及び卒業時の自己効力感の変化, 日本女子体育大学紀要第44巻: 93
- 4) 國光みどり (2009) 幼稚園教育実習における現状と課題, 近畿大学豊岡短期大学論集第6号: 36
- 5) 松山由美子 (2010) 保育者養成における『保育実践力』育成のための学びの場, 四天王寺大学紀要第49号: 197
- 6) 鈴木佐喜子 (2010) 保育・教育実習テキスト, 診断と治療社, 1
- 7) 鈴木佐喜子 (2010) 保育・教育実習テキスト, 診断と治療社, 38

- 8) 田甫綾乃 (2009) 教育実習入門期における指導のあり方をさぐる, 國學院大學幼児教育専門学校紀要第23号: 8
- 9) 塚田まゆみ (2008) 幼稚園教育実習の現状, 鹿児島純真女子短期大学研究紀要第38号: 63

参考文献

- 天野珠路, 埋橋玲子編著 (2013) 保育原理, 全国社会福祉協議会
増田まゆみ, 大島恭二編著 (2013) 保育実習, 全国社会福祉協議会
森上史朗監修 (2013) 最新保育資料集2013, ミネルヴァ書房
二階堂邦子編著 (2013) 教育・保育・施設実習テキスト第2版, 建帛社

(平成26年9月10日受付)
(平成26年12月17日受理)

